【308】

| | |
|---|---|
| 氏　名 | 福　田　　稔（ふくだ　みのる） |
| 学位の種類 | 農　学　博　士 |
| 学位記番号 | 論農博第 160 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和 42 年 5 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 5 条第 2 項該当 |
| 学位論文題目 | **農業構造変化の諸要因と過程に関する実証的研究** |
| 論文調査委員 | （主査）教授 中嶋千尋　教授 神崎博愛　教授 来原正信 |

## 論文内容の要旨

本論文は日本経済の戦後の成長発展過程において発生した農業構造の変化のいろいろな側面を，それらをひき起こした諸要因との関連において実証的に分析したものである。

まず著者は農業構造なるものを，（1）農業生産要素構造，（2）農業生産物構造，（3）農業経営方式構造，（4）農業経営規模構造，（5）農業地域構造，に分ける。そして著者はまず前編においては，昭和30年代のわが国の農業がちゅう密集約化段階から機械化段階への過渡期にあったことを明らかにし，この時期において「工業化」という外生的要因が農業構造に与えた効果を巨視的・統計的に分析した。そして，(a) 工業化は農業生産要素構造に関しては，農業労働力単位当り農地面積および資本財量を増加させ，また農地面積当り資本財量を増加させる。(b) 工業化は農業生産物構造に関しては，需要の所得弾力性の高い農産物の比率を高める。(c) 工業化は農業経営方式構造に関しては経営の専門化を促進する。(d) 工業化は農業経営規模構造に関しては，零細規模経営を減少させ大規模経営を増加させる。(e) 工業化は農業地域構造に関しては，農業生産の地域的専門化と立地移動とを促進する。以上の諸命題をたててそれを実証した。

つぎに著者は後編においては，岡山県南部に関する二つの事例的研究によってつぎのことを明らかにした。すなわち農業構造の変化は外生的要因から独立に農業者自身の創造的意欲という内生的要因によってもひき起こされうるものであること，そしてこの地域における機械化という重要な構造変化が，日本農業の一般的な機械化段階への移行よりもはるかに先行して起こったのは上述の内生的要因の効果である，ということである。

## 論文審査の結果の要旨

農業問題を農業内部の問題としてのみでなく国民経済全体との関連における問題としてとらえることが，戦後の世界の農業経済学における重要な一傾向なのであるが，本研究はこの線に沿って行なわれたも

のである。そして著者は，急速な成長過程にあった昭和30年代の日本経済において農業部門に発生した構造変化の諸側面を，それをひき起こした諸要因との関連において実証的に分析したのである。

本研究はまず農業構造なるものを，農業生産要素構造，農業生産物構造，農業経営方式構造，農業経営規模構造，農業地域構造にわかち，工業化という農業にとっての外生的要因が農業構造の各側面に与える効果を巨視的・統計的に分析して，つぎの五つの命題を実証した。すなわち第一に，生産要素の結合比率において資本財の比率が次第に大となり，土地がそれについで大となり，労働力の比率が次第に小となること。第二に，各種農産物のうち需要の所得弾力性の大なるものの比率が大となること。第三に，農業経営の専門化が進むこと。第四に，零細規模経営が減少し大規模経営が増加すること。第五に，農業生産の地域的専門化と生産立地移動が進むこと，である。

つぎにまた本研究は，農業者自身の創造的意欲という農業内部の要因が農業構造の変化をひきおこす重要な要因であることを，二つの事例研究によって明らかにした。

以上に述べるごとく本研究は農業構造の変化という重要問題に関する新知見を与えるものであって，農業経済学の進歩に貢献するものということができる。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。